

ならばい・たより



ゆいのさと
NPO法人まちだ結の里

12月からの活動、事象を時系列で記載していきます。

- 1) 12月14日(水) イベント展示米の脱穀、孟宗竹林の調査、黒米の選別、真竹林の整理



孟宗竹林の調査	調査場所の総本数	平均周囲	平均節間	今年発生の竹本数
2015年 1月	67	33.2	23.1	14
2015年 11月	68	33.3	23.4	01
2016年 12月	91	34.2	22.8	23

筍の発生が隔年で増える様子が今年発生の竹本数の増減でわかります。

また、今年発生した竹が太いせいか周囲が増えています、刈り取ると重いという事です。

200㎡で91本と増えているため、古い竹や隣接している竹の間伐が必要です、200㎡で60本から70本が適当な本数と考えますので、結構間伐が必要と判断します。

2017年は、タケノコが少なくなる年なので大事にしないとけません。

2) 12月17日(土) 草刈、刈った草の処理、真竹調査



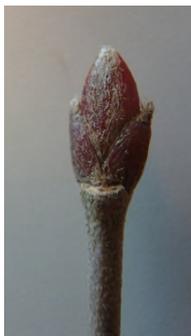
真竹林の調査	調査場所の総本数	平均周囲	平均節間
2015年	93	13.2	25.9
2016年	173	13.1	26.0

真竹は調査地域を密集地にしているため多く感じますが、管理地域を孟宗竹林と同程度の広さで管理したいと考えています。おおむね450㎡、調査区は200㎡です。

関東に降る雪は水分が多くぼた雪になるため、幹が細い真竹は葉に雪が積もり重さで竹が曲がってしまいます。調査で感じたのは、蔓が巻き付きほかの竹を巻き込んでいる状態も見えました。

3) 12月18日(日) 植物観察

冬芽、樹皮の観察が面白い、葉痕の面白いのを探してみたい。



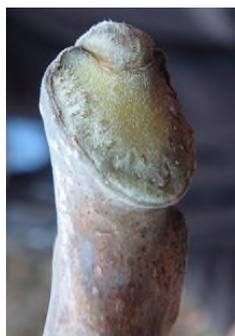
ガマズミの冬芽



ゴンズイの冬芽



ヌルデの冬芽



ホラシノブの紅葉

4) 12月21日(水) そば打ち



栗の選定



そば粉を振う



小麦3とそば7の粉に水を入れねり混ぜる



捏ね最終、一つにまとまる



延ばし



切る



ゆでる



完成



食す



5) 12月24日(土) 麦踏、真竹整理、大掃除



イベントでよく利用する場所で今まであった柵を交換し生垣として真竹の枝を利用した。

6) 1月4日(水) 白山神社に参拝し昨年一年の無事を感謝し本年の安全祈願



7) 1月7日(土) 落ち葉集め、刈り取った葦・下草等の処理・処分、炭小屋上の丘のコナラの伐採、メカイ籠講習



広葉樹は木掛かりが問題を起こします。 注意深い作業で木掛かりを解除していく



メカイの材料ヒネ作り

8) 1月11日(水) 真竹の整理、伐採済の木の整理、炭焼窯補修準備(土、篠竹取り、藁等)



窯補修用の土の掘り出し

土の運搬

掘り出した土

9) 1月14日(土) 炭焼窯の補修、炭焼小屋前広場及び周辺の整理、町田第三中学校里山体験



棕欄繩を網の目に張る

棕欄繩の網を芯に土を塗り込む

窯の甲羅補修終了



窯口の補修 さすがに土が足りず急きょ追加の土堀を行った。

1 0) 1 月 18 日 (水) 果樹への追肥、 孟宗竹の選別、



たい肥の掘り出し



追肥



炭焼き窯周りの杭交換 煙突を受ける

1 1) 1 月 21 日 (土) 孟宗竹の伐採・整理、近隣農家の手伝い
孟宗竹林広場 (タケノコ掘りのメイン会場) の孟宗竹の伐採・整理



ヤマノイモ堀 荒井さんの写真

1 2) 1 月 22 日 (日) 植物観察会



ヤブコウジ



マルバアオダモの冬芽

1 3) 1 月 25 日 (水) 温床作り、忠生中学職場体験



連日の寒さで氷が

おもてなしのお餅を焼いています。 桜の木難しい場所の伐採で木掛かり

1 4) 1 月 28 日 (土) 刈り取った葦の整理・処分、孟宗竹の整理、もや分け



もや分け 「萌芽更新
のために伐採した木の
脇から出てきたヒコバエ
の枝? で成長させるもの
を選び他を切り取る作業」



15) 2月1日(水) 真竹の間伐・整理、ほだ場手前(イヌザクラ広場側)の草地(葦原)の下草刈り



市が貸し出す予定の畑の整理状況 ほだ場手前の草地下草狩りと整理

真竹の整理

16) 2月4日(土) 孟宗竹の間伐、メカイ籠講習会、炭焼準備



炭焼きの準備

葦の処分

先生によるふち巻き

17) 2月8日(水) 真竹の間伐・整理 剪定枝葉のチップ・購入し畑に散布、炭焼準備粗朶、なぐり等作り



18) 2月11日(土) 窯出し、玉切り、メカイ講習会、精舎児童学園の園児来訪。富士見ベンチ下の斜面の落葉集めの作業



炭の状態は上々。→A=114.9kg、B=8.9kg C=8.5kg 合計132.9kg

19) 2月15日(水) 植菌の準備、畑への肥料の引き込み&耕起



玉切りした植菌用の木を運搬



運搬した木を一時保管



畑の耕耘



20) 2月18日(土) シイタケ、ナメコの駒打ち、こんにやく造りとメカイ講習



21) 2月19日(日) 自然観察会

22) 2月25日(土) 木炭の炭焼き準備、道普請、真竹の処理



写真 菊池さん

23) 3月1日(水) じゃがいも畑の面積の測定、中央通路の道普請、小野路交流館での展示作業



24) 3月4日(土) 道普請、ハナモモ斜面整理、シュレッター作業



孟宗竹のシュレッター作業、竹の粉末がすごい、風下はマスク必要

シュレッター屑は孟宗竹林の肥料として撒く。

この作業中に大発見、イチヤクソウの群生が有りました。

25) 3月8日(水) ジャガイモの植え付け、道普請



246 平方メートル(20.5×12.0 メートル) 畝の長さは 20.5 メートル 畝幅は 90 センチメートルで 13.5 列

種類	重量	株数
男爵	20 キログラム	388 株
キタアカリ	10 キログラム	252 株
ベニアカリ	1 キログラム	22 株
その他	12 キログラム	300 株
合計	43 キログラム	962 株

以上ジャガイモの植え付けについて。

26) 3月11日(土) 竹炭の取り出しと、炭用材木の搬入



27) 奈良ばいに生息するウサギについて調べてみました。

・奈良ばいに生息するウサギは「ニホンノウサギ」です。写真は休憩所の上で

今ペットショップで売られているウサギ(カイウサギ)はアナウサギを起源とされています。

以下に分類表を示します。 [このウサギの基礎を参考に記載](#)



ウ サ ギ (重 歯 目)	ナキウサギ科			ナキウサギ属 (エゾナキウサギ)
	ウサギ科	ム ウ カ サ シ ギ 亜 科		アマミノクロウサギ属 (アマミノクロウサギ)
				メキシコウサギ属
				アカウサギ属
		ウ サ ギ 亜 科	ノウサギ類	ノウサギ属 (ユキウサギ、ニホンノウサギ) ニホンノウサギはトウホク、キュウシュウ、サド、オキ という種に分かれるとする説もある。
		アナウサギ類	アナウサギ属 (ヨーロッパアナウサギ) ブッシュマンウサギ属 アラゲウサギ属 他4属は省略	

赤で示したものが日本に存在するウサギの種類です、しかし最近ではカイウサギが放置され野生化しているところもあるようです。(ウサギ島のように海で隔離されていればよいのですが、台湾リスのような拡大は困る。)

アマミノクロウサギとニホンノウサギは日本固有種、ユキウサギはユーラシア大陸の北半分にくまなく分布。

ノウサギは夜行性であるが、夕方と朝方が一番活動的で昼に活動していることもある。そのためか、奈良ばいでノウサギを日中でもたまに見ることがあります。

「野生のウサギは世界中で12属78種(うちナキウサギ属は1属25種)ほどしか存在せず、1996年の国際自然保護連合(IUCN)の新基準によるレッドリストにおいては、絶滅に瀕するウサギとして41種類が掲載されている。」ウサギの基礎より。

「<http://www.jpnrdb.com/>」日本のレッドデータ検索システムを参照しにレッドリストに有るかを調べましたが、下記の通りでした。

東京都版レッドデータブックの2010年版では区部は情報不足、北多摩郡は絶滅危惧Ⅱ類(VU)「VUとは、現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実に考えられる」、南多摩、西多摩ではランク外とされています。

ノウサギ類とアナウサギ類の比較を「ウサギの基礎より」以下に記載します。(子ウサギは加筆しています。)

種類	ノウサギ類	アナウサギ類
生態	体長45-54センチメートル。尾長2-5センチメートル。体重1.3-2.5キログラム。全身の	身体:頭胴長38-50cm、尾長4.5-7.5cm、耳長6.5-8.5cm 原産:イベリア半島とアフリカ北西部(ヨーロッパ西

	<p>毛衣は褐色、腹部の毛衣は白い。耳介の先端は黒い体毛で被われる。</p> <p>耳長 6-8 センチメートル。後足長 12-15 センチメートル。</p> <p>東北地方や日本海側の積雪地帯、佐渡島の個体群は冬季に全身の毛衣が白くなる。積雪する地域では秋頃より体毛の色が抜け落ちはじめ、冬には耳介の先端の黒い体毛部分を除き白化し、早春頃より白い体毛が抜け、徐々に赤褐色から茶褐色の体毛が生えてくる。</p> <p>食性は植物食で、葉、芽、樹皮などを食べる。基本的に巣は作らず、地面のくぼみ（フォーム）の利用が多い、ほかには木のほら、アナグマの巣穴、岩の割れ目、木の根元にできた雪穴などを利用、出産も窪地にそのまま産み落とすだけ、生まれた子供は成獣をそのまま小さくした状態で、生後間もなく動く。</p> <p>授乳は一日に一度から三度で一度がほとんどで2週間程度で哺育は終了するようです。</p>	<p>部、オーストラリア、ニュージーランドへは移入された）生態：草原や森林、草木のある丘陵地帯に棲息し、1頭ずつ巣穴を掘り、群集生活を行う。巣穴はワレン（warren）と言われ、多くの入口と緊急用出口のある複雑な形態をする。巣穴のトンネルは約 15cm、部屋の高さ 30-60cm であり、部屋は巢室、トイレなどに分別されている。年長のメスはメインのトンネルに巣をつくるが、順位の低いメスは出産のため短い行き止まりの巣穴を掘る。母親は1日1回授乳のために通い、入口は常に土で塞がれている。基本的に夜行性であり、成体は植物の葉、茎、根、そして穀類あるいは栽培食物などを摂取している。</p> <p>生まれた子供は毛のない裸であり、眼も耳も開いていない未発達な状態で生まれる。巣穴には毛のない状態で生まれるため巣材、お腹の毛をむしった毛、乾いた草がひかれている。</p> <p>授乳はノウサギと同じであるが、親が巣穴に行き授乳後その巣を埋める、哺育は3週間から4週間程度</p>
仔の数	1 から 4	4 から 10
妊娠期間	約 42 日	約 32 日

ニホンノウサギはアナウサギのような巣穴を作っているとの記述は一切見当たりませんが、アマミノクロウサギは子育ての時産卵用の巣穴を掘り子供をその中に隠し夜間の授乳で育てている。

ノウサギの子育ても、出産が終了したら親はすぐに離れてしまうようで、夜の授乳の時までは子ウサギはじっとして隠れているだけとの観察があります、夜の授乳以外の時親は子ウサギの近くにいるようですが、ウサギのにおいを付けなためか、授乳以外に子ウサギには近づかない、その子ウサギは離乳、巣離れとなり食草についての親の教えもなく巣立ちする、しかし草は生まれて数日すると草を食べているようです。（ノウサギを数年飼育した記録から）

兎の乳は夜間の1回程度で間に合うほど濃い乳なのではないでしょうか、推定ですがカイウサギにもある食糞が関係しているのではないかと、ウサギは食べた草を盲腸、結腸に蓄積し腸内細菌で分解した粘液質の盲腸便を再度飲み込むことでビタミン他栄養素を取り込んでいるのではないかと、この食糞がないと身体障害を起こすようです、ノウサギが自分のお尻に口を当てなめていることがある、その時が食糞している時ではないかと。

ニホンノウサギの生息地域としては、亜高山帯まで（主に低山地から山地）の草原や森林などに生息する。群れは形成せず単独で生活する。特定の巣は持たないが、ねぐらを中心に半径が約 400m の範囲で行動する。夜行性で、昼間は藪や木の根元などで休む。（通常は1羽で2から3ヘクタールの縄張りと考えられている。）

奈良ばいでの天敵としてはオオタカ、ノスリ、イタチ、ヘビ、イヌ、ネコなどが考えられる。

私も 2007 年 6 月 2 日に万松寺谷戸で、青大将に狙われ捕食された子ウサギを見ている。（写真有、掲載は無）食性は植物食で、葉、芽、樹皮などほとんど全種にわたって食べる。毒草のトリカブトさえ食べるといわれている。（おそらく成長途中の毒の少ない時期ではないかと記載されている。）

ノウサギにニンジンを見せてもすぐには食べないそうですが、食べ慣れると食べているそうです、好んで食べるのは若芽で、大豆の若芽は最大の好物ということで、奈良ばいでは畑に植えた作物の若芽が被害を受けています。

ノウサギの食事場所は、開けた草原が主体、そこは、乾燥地で陽性の草本類が多く、夜はタカ類が飛ばない、キツネはかなり少なくなり、ほとんど気にすることはないと思われ、フクロウが唯一気を付けるべき対象です。山では夏にふもとから、山頂の草原にノウサギが移動するため、ウサギ平などという名前の地名が見られます。

最後にちょっと怖いお話ですが、野兎病という病気についてのお話です。

調べた本に載っていた話では、「タカが飛んでいる下でうずくまっていたウサギを手で捕まえ、みんなで鍋を食べていた、その後から来た人が、簡単に人の手で捕まるのは病気持ちに違いない、と食べなかった。3 日後、ウサギを解体調理した人が、だるく、熱もあり、リンパも腫れなかなか治らず入院、医者も原因がわからず病状が悪くなっていった、医師の頭に野兎病ではという疑問が出てウサギを食べたかと聞き、原因が判明し半月後に退院」という話でした。この人は、指にけがをしたまま解体をして感染したようです、鍋を食べた人は何も起こらなかった。

国立感染症研究所獣医科学部 <http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k06/k06_22/k06_22.html>

ここに記載されている記事を要約します。

野兎病 (tularemia) は野兎病菌 (*Francisella tularensis*) による急性熱性疾患で、代表的な動物由来感染症の一つである。自然界において本菌はマダニ類などの吸血性節足動物を介して、主にノウサギや齧歯類などの野生動物の間で維持されており、これらの感染動物から直接あるいは間接的にヒトが感染する。

野兎病は北米、北アジアからヨーロッパに至る、ほぼ北緯 30 度以北の北半球に広く発生している。

米国やスウェーデンなどの海外の汚染地域では毎年散発的に起っており、ときに流行を示すこともある。

日本では 1924 年の初発例以降、1994 年までの間に合計 1,372 例の患者が報告され、東北地方全域と関東地方の一部が本病の多発地である。発生の季節性は、吸血性節足動物の活動期 (4~6 月) と狩猟時期 (11~1 月) の 2 つのピークを示す。第二次世界大戦前は年平均 13.8 件であったが、戦後は 1955 年まで年間 50~80 例と急増した。その後減少傾向を示し、1999 年の千葉県での 1 例以降は報告されていない。

戦後の患者数の急増は、食糧難のためにノウサギを捕獲・解体する機会が増加し、また 1964 年以降は経済の高度成長に伴い生活様式が変化し、ノウサギとの接触機会が減少したためと考えられている。

感染様式：大部分の患者は保菌動物の剥皮作業や肉の調理の際に、菌を含んだ血液や臓器に直接接触することにより感染している。さらに、マダニ類やアブ類等の吸血性節足動物による刺咬からの感染例も報告されている。ペットに付着したマダニ除去の際に、虫体を潰して体液が目飛び込んだり、指が汚染されることによるものもある。

野兔病はペストに類似した臨床症状を呈するが、感染初期においては特徴がなく、しばしば誤った診断がつけられる。野兔病は急性熱性疾患で、感染後3日目をピークとした1週間以内（稀に2週間～1カ月）の潜伏期間後に、突然の発熱（38～40℃）、悪寒・戦慄、頭痛、筋肉痛、関節痛などの感冒様の全身症状が認められる。

野兔病では抗菌薬を用いた治療が有効で、早期の治療開始が重要である。

全身治療：硫酸ストレプトマイシン 1 g/日（またはゲンタマイシン 40～60 mg/日）の筋注と同時に、テトラサイクリン 1 g/日・分4（またはミノサイクリン 200 mg/日・分2）の経口投与を2週間続ける。症状が残れば、テトラサイクリン系抗菌薬を半量にした内服をさらに1～2カ月間続ける。ペニシリン系、セファロスポリン系抗菌薬は無効である。

詳細は URL のアドレスで参照をお願いします。

日本では、近年見られないようですが、お気を付けください。

資料：<http://epc-vet.com/animal/rabbit/pdf/rabbit.pdf> ウサギの基礎

<http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k06/k06_22/k06_22.html> 国立感染症研究所獣医科学部

「ウサギがはねてきた道」著者名等：川道武男／著、出版者：紀伊國屋書店、出版年 1994. 02

「ノウサギの生態」著者名等：高橋喜平／著、出版者：朝日新聞社、出版年 1982. 3